A TREASURY OF JAPANESE LITERATURE

日本の文学

61

中山義秀

中央公論社

日本の文学　61

©1967

中山義秀

昭和42年10月25日初版印刷
昭和42年11月 4 日初版発行

価390円

発行者　山越　豊

本文整版印刷　三晃印刷株式会社
扉・函貼印刷　東京プロセス株式会社
色刷口絵印刷　株式会社大熊整美堂
口絵写真印刷　東京プロセス株式会社
本文用紙　本州製紙株式会社
クロス　日本クロス工業株式会社
製函　加藤製函印刷株式会社
函ボール　佐賀板紙株式会社
製本　中央精版印刷株式会社製本部

発行所　中央公論社

東京都中央区京橋2丁目1番地
電話(561)5921(代)　振替東京34

目次

栄耀 7
厚物咲 27
碑 51
荒海 86
囚人 107
酒屋 137
華燭 169
信夫の鷹 192
テニヤンの末日 208

緑　珠　247
散りゆく花の末に　258
闇に浮く睡蓮　290
春　日　321
天保の妖怪　334
黎　明　353
咲　庵　363
孤　峭　465
土佐兵の勇敢な話　474

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongboo

注解　486
解説　平野謙　502
年譜　516
口絵「咲庵」　関野準一郎
挿画　関野準一郎

中山義秀

栄　耀

万里子はもう四十である。

大柄で一度は泥水にしんだ身体であるから、年よりは老けて見え考えも素人とは違う。たいへん肥って醜くなり成功した女の勝気を、鼻の下にぶらさげているので感じはよくない。

万里子が艶麗をきわめた十七、八歳時分の写真を見せられると、まるで嘘みたいな気がする。彼女が*葭町で指折りの売れっ妓だったころのものだ。正面から少し斜め向きにすらりと立ったお座敷姿は、咲きほこる牡丹の花のあでやかさである。現在のみずみずしさを失った彼女とくらべて、女とはいかに変化するものであるかという見本みたいなものだ。しかし変化したのは、あながち彼女の姿のみではないのである。

万里子は今、貸座敷万華楼の主人である。近ごろはまた万華楼のある盛り場附近に、新しくホテルを拵えた。実は連込客を専門とした時代向きの待合風の宿屋なのだが、寝台附き風呂場附きの区画された部屋部屋の設備は、安ホテルの遠く及ばぬ豪奢さで資本もなまなかのものではなかろうと思われる。

万里子の背後には、もちろん歴とした旦那が控えている。警察署長あがりの区内のボスである。ボスはもう政治の表面には立てない時代となったが、金儲けの方にはそれだけ抜け目がなくなってきた。区政各方面の要所要所には、旧部下が据えられてあり、有力な政党人や実業家連との顔つきあいも広い。

この滝沢と万里子との関係は、もう相当長い年月に渡っている。万里子は滝沢の邸へも公然出入りしていて、滝沢家の財政から家政の方にまで口を出し、滝沢がボスなら彼女は女ボスといった地位にある。

滝沢夫人真佐枝は万里子のため、あれどなきがごとき待遇をうけている。せいぜいのところ家政婦ぐらいの格だ。滝沢家の月々の経費、召使たちの給料、お子さんや奥さんの小遣いまで割り当て、出入り商人の応対、乾児らの操縦、時には客の接待まで万里子が一手に取り仕切っている形で、夫人の存在は反対に日陰者の身の上である。

万里子が滝沢家の家政を掻き廻すようになってから、真佐枝夫人は熱心な基督教信者に改宗した。夫人は良家の育ちであって教養がある。しかし夫人の教養なぞは、

世間の荒波で鍛えあげられてきている万里子には歯が立たなかった。また夫人は、万里子のような女とは到底較べものにならぬくらい深く、真実に滝沢を愛していると自信していたけれども、万里子が滝沢を自由に操り支配してゆく事実をどうすることもできなかった。男の実体を喰い荒らし、その力を巧みに利用してゆく点では、ただ良人にまめまめしく仕えることだけを信条として生きてきた夫人など遠く及ばないのである。それに万里子には、安規子という万里子にも一つ輪をかけたような母親が後に附いていた。

真佐枝夫人の長男はすでに大学を出て、地方で官吏勤めをしている。上のお嬢さんも他家へ片づいたが、まだ中学生や女学生のお子さんたちが二、三残っていた。夫人はお子さんたちにも洗礼をうけさせた。信仰の擁護によって異教の悪魔から、子供らの魂を護ろうとしたかのごとくである。

滝沢は熱海と那須とに別荘を持っていて、身体の弱い夫人やお子さんたちの好い避暑地または避寒地となっているのだが、万里子はそれらへも滝沢と同伴で乗り込んでゆくばかりか、取引関係の客もさかんに招待する。そして土地の芸妓をよんで大騒ぎすることがあった。万里子自身三味も踊りも達者だったから、お客の饗応役にはうってつけである。夜を徹しても飲みあかそうという陽気な座敷を隔てた一間では、夫人がお子さんたちに聖書を読み聞かせながら忌わしい夜の過ぎるのを待っているような有様だった。

夫人の長男や長女の反対ぐらいで、万里子を滝沢から離すことはできなかった。万里子と滝沢の間はたんに妾と旦那の関係ではなく、事業上の協同者のような関係にまで拡がりつながっている。滝沢はもう万里子の協力なしには、彼の事業の大半を経営してゆくことができない。万里子の方でまた滝沢の資本をあてにしないでは、彼女の稼業を発展させてゆくことができないのだ。

世間的な眼で見ると滝沢は万里子に欺され、うまく利用されているにすぎないようだったが、滝沢も馬鹿な男ではないから万里子の使い道をちゃんと心得ていた。彼が動きのはげしい社会に立って*驥足を伸ばしてゆくためには、愛欲をはなれても万里子のような女が必要だった。温室育ちの真佐枝夫人では物の役に立たなかったのである。

こういう位置にあってみると、真佐枝夫人は実際信仰にでも縋るほか仕方がなかったに違いない。良人の愛を奪われたばかりでなく、自分たちの生活権まで敵の手に握られているわけである。

そのまた敵が一通りの女ではない。夫人を馬鹿にしきっている。夫人の思惑や感情なぞ、てんで問題にしてい

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook

ない。世間の表情にたいしてもその通りである。

万里子が世間を馬鹿にしている証拠に、こんな例をあげるのはどうかとも思われるのだが、彼女は普段に男女交合の姿を肉筆で描いた羽二重裏の羽織を着て、平然として万華楼やホテルの帳場に坐っている。花柳界出身の女であってみれば、別に稀らしい事実ではないかも知れぬが、万里子の場合は縁起をかつぐとか何とかいうのではないのである。人間原始からの姿を背に負って、世間を睥睨したつもりでいるのだ。

儲け仕事ならば善悪はもとより手段を択ばない。いや善悪などということは、最初から問題ではないのだ。己が生涯の中に何事にでも、出来るだけの力を揮ってみたい野心に駆り立てられているのである。

だから真佐枝夫人の信仰など、おかしくてならない。夫人の信仰の動機が、万里子自身にあることもわかっているので、かえって夫人の前に傍若無人に振舞ってみせる。夫人が信仰によって敬虔に勤めれば勤めるほど、万里子は横暴さを募らせ、夫人を虐げ苦しめる。召使らの前で夫人の愚図や気の利かなさを、呶鳴りつけたりするのは毎度のことである。

真佐枝夫人はすでに五十を過ぎて、家庭の平和と、子供たちの幸福と、一身の安泰を願う以外に他念はない。それゆえ甘やかし児をつけ上らせる母親みたいに、夫人がどこまでも万里子に従順で、信仰を支えに辛抱しているのも、つまりわが身のためなのであるが、実は内心、万里子を恐れるところもあるのだ。万里子のために家庭を追い出される不安よりも、万里子の人間が怖いのである。夫人の信仰はむしろ万里子にたいする、この恐怖感が原因だったかも知れない。

万里子のような女は、夫人の手からも考えからもはみだしていた。万里子が苦労しただけの女であるならば、夫人の教養でうち勝つことも出来るのであるが、滝沢を思うままに操縦する万里子の力が、夫人をもまた苦もなく押えつけてしまうのだ。夫人は万里子に刃向うことができない。万里子の大柄な肥った身体から流れてくる何かしら鋭く旺んなものに、夫人は心弱く圧迫されてしまう。

それに万里子には悪い癖がある。彼女は酒の度を越すと酒乱になるのだ。そうなるともう誰も手がつけられない。眼が燐のように燃えてきて、顎をぴりぴりと顫わしながら啖呵をきる。手当り次第に物を投げる。滝沢などは引っ掻かれて顔や手が傷だらけになる。一度は自動車の中で暴れだして、滝沢のステッキで運転手を殴りつけ、車から飛びだすと深夜の街を暴れまわって、商店の窓硝子や街燈を叩き壊し警察沙汰になりかけたことがある。滝沢の邸へ出入りするようになった始まりも、実は万里

子が酒に乱酔して暴れこんで行ったのだ。だから滝沢は万里子が酒を飲む時は、いつもびくびくしている。しかし万里子は商売用で客を接待する時には、決して酒に酔わない。酔っても暴れだすのは客が帰った後からである。彼女のために手を焼くのは、大抵滝沢一人なのだ。そして妙なことに滝沢は、こういう万里子に一層惹きつけられてゆくのである。

真佐枝夫人は日曜日ごとに教会へ行くのを何よりの慰めとしている。祈りによって自分の不幸が救われる感情のすがすがしさは、万里子のような者の決して経験することの出来ない神聖事として、彼女のひそかな誇りとなっている。悩める者、虐げられている者のささげる敬虔な祈りは、常に神によって真っ先に聴きとどけられるという悦びに燃えているのだ。

そうした夫人の出先きに、たまたま万里子の行き合わしたことがある。

「奥さん、教会ですか」

「はア、万里子さん、あなたのためにもお祈りして参りますよ」

聞きようによっては夫人が万里子に向って放つ精一杯の抗議ともとれる言葉を、万里子は皮肉な微笑でうけとめるのである。

「奥さん、私だってお祈りしたことがありますよ。しかし、自分の道楽にじゃありません」

「まア、自分の道楽にですって」

「ええ、私のためにお祈りして下さるなんて、あなたのお道楽ですよ。私はこんなに仕合せなんですからね」

と、まず夫人に唇を噛む思いをなめさせておいて、

「要心なさいよ。神様は欺しますからね」

と、冒瀆の言葉を吐いた。万里子が夫人を馬鹿にしているのは明らかだとしても、神まで侮辱するのを夫人は怨せない気がした。夫人は信仰のことになると、ついムキになった。

「万里子さん、あなたも母親になられたら、そんな恐ろしいことはおっしゃらないでしょうよ」

「母親ですか。母親の経験なら、私の母だけでもうたくさん」

万里子は舌を出すところを首をすくめて見せた。そしてもう夫人の相手にはならなかった。夫人はさすがの万里子も自分の母親には頭を押えられていることを思うと、いささか胸がすくような気がした。気の強いことにかけては、万里子の母の安規子は娘にまさる悍婦だったからだ。安規子は六十のお婆さんである。しかし美食と安易な生活に馴れて、見かけは若々しい。美しかった昔の面影をさえ止めている。いつもにこにこと愛想がよくて、万里子などよりずっと穏しそうに見える。普段は万華楼

の隠居所に隠れて姿を人に見せないが、万里子の留守の場合は帳場に坐って締括りをつける。万里子がホテルを経営し始めて、ずっとそれに掛り詰めになってからは、万華楼の帳場は安規子がほとんど預かっている。ホテルへも時々監督に出かけて行く。そして妓楼の女たちや婆さんや妓夫太郎、ホテルの女中や番頭などから恐れられている点から云えば、口喧しい万里子よりもこの表面穏しそうな安規子の方が怖がられているのだ。やり手で気が強いと云っても、万里子はまだなんとしても年若い。落ちついてにこにこしながら、チクリチクリと相手を刺してくる安規子のやり口には敵わないのである。

こういう母娘が二人並んでいるところを見ると、実によく揃ったものだという感じがする。そして万里子が女の身空でこれまで叩きあげてきたのも、安規子のような母親が万里子の背後で采配を揮っていたからだと思わぬわけにはいかない。子供だけが力の真佐枝夫人が、こうした母娘と太刀打ち出来ないのも当然である。

ところが安規子と万里子とは、内実はひどく仲が悪いのだ。表面にはそうした事実を少しも洩らさないけれども、母娘の間には何としても蔽いがたいひややかな感情の溝が掘られているようである。万里子はホテル、安規子は万華楼と別れ別れに住んでいるのは、商売の都合上不思議はないが、母娘の間の冷やかさに気づいた者は、その底にやはり何か原因があるのだと考える。

万里子の父の帯広は、田舎の無能な新聞記者だった。小心な律義者であるだけが取柄で、悪辣な記事を書いて読者を歓ばせるような才能はなく、またそれを利用して地方の有力者や富豪に取り入り、出世の足場を築いてゆくような図太さはもちろんなく、仕事も広告取りがおもで広告主たちを相手に碁をうつことと、毎日曜日教会の礼拝にきちんと出席することが、変っているといえば変っているような男だった。

変色した帽子、汚れたカラア、細く捩れたネクタイ、ツギの当った背広服、底のへった靴、給料の廉い田舎記者らしく服装は見すぼらしい。その上ひどい近眼である。頭髪は三十前だのに薄くなりかけ、顔は灰色で猿のように皺ばんでいる。教会ではいつも祭壇のすぐ前にぽつりと一人席をしめて、膝の上に恭々しく聖書をひろげ牧師の説教に耳を傾けながら、口の中でぶつぶつと牧師の言葉を復誦している。

そのころ教会といえば、田舎でも相当華やかな雰囲気の中で、帯広は目立って奇妙な存在だった。こういう彼に、中流の家庭に甘やかされて育った安規子が恋したのは不思議である。多分に文学少女的な感傷や同情が、原因したのであったろう。まだ十八歳の少女の信仰は、試

煉に憧れていたのだ。

安規子は妊娠した。安規子の両親が帯広との結婚に、きびしく反対することは分っていた。それで二人はよその市街に駐落ちした。そこで万里子を生んだ。

安規子の罪の生活、帯広の不幸、万里子の生涯がこれから始まるわけだが、最初の三年間は比較的楽しい家庭生活が三人の上に続いた。富豪の後継者だった帯広の友人の信者が、気の毒な狂人らのためにその市街に脳病院を建て、帯広を会計係りに雇って彼に暖かい巣を提供したからである。

帯広は海に臨んだ丘の上の白堊の病院内に住み、花園を造り小鳥を飼い妻子を愛し、いよいよ信仰に凝った。しかし脳病院は四年目に潰れてしまった。その市街には古くから有名なもう一つの脳病院があった。素人が慈善と営利をかねて経営し始めた新しい病院は、その古い病院との競争に勝てなかった。次第に雇員の数が減らされ、給料不払いが幾月か続いた後、設備と費用とにおわれて重なった借金のため、病院はとうとう解散した。

病院を出た帯広夫妻は、新たに借家住いを始めた。貯えとてなく退職金もえられなかった彼らは、早速その日の生活にも困りだした。安規子は決心して市一流の料亭の仲居*になった。彼女の美貌に惚れこんだ料亭の主人が、一家がかつかつ喰べるだけの給料と通勤とを許してくれたためである。

帯広は毎夜妻を迎えに、晩く料亭へ通った。昼は就職に奔走したが、思うようにゆかなかった。何も定職を持たぬ女の勤めとしては、就職が容易で不時の収入があったにしても、仲居奉公は苦労を知らずに育った安規子には、なかなか堪えがたいものだった。その辛さが夜ごと肩を並べて家へ帰る道々の良人への愬えとなり、やがては働きのない良人を怨む涙に変ってきた。

帯広はそれで一層生活にあせりだした。毎日ただぶらぶらして遊んでいても仕様がないというので、何か仕事があるまでの片手間に、あまり資本を要せぬ碁会所を開くことになった。しかし田舎の市街に、日々碁をうって暇つぶししている人間は、そうたくさんはいなかった。そして少数の定連客は、彼のところを根城にして賭け碁を始めた。

帯広も客足をつなぐために、その仲間に加わらなければならなかった。彼は碁は下手ではなかったが、賭けには弱かった。小心者のため勝負にのぼせ上ってしまうためである。そして負けるとすぐ損失を取り返そうとあせって、さらに負けを大きくした。しかし碁会所の日々の収入がふいになるくらいな賭け金の間はまだよかったが、そのうち町の隠居や旦那方の勝負に賭け事専門の遊び人たちが加わってくると、賭け金の額はにわかにふくれて

きた。碁会所の月の収入を全部投げだして足りなく、妻の不時の祝儀をあてにし彼女の給料にまで損失が及ぶようになると、帯広の血相が変って来た。近眼の瞳は飛びだしてギラギラと光り、灰色の額は青く筋張って頬が落ちてきた。そして対局にひどく神経質になってしまって、打出しの第一石からもう指がブルブルと顫えだしているような仕末だった。

帯広は一切信仰を顧みなくなった。彼よりも前に安規子は信仰を捨て去っていた。万里子はそのため教会へ連れて行ってもらえる楽しみもなくなり、毎朝父と一緒に近所の公園へ行って鳩と遊ぶことも出来なくなった。万里子が遊ぶことを父にねだると、勝負に熱中している帯広は返事の代りに銅貨を投げだしてよこした。万里子はそれで日に幾度となく買喰いをして退屈をまぎらせた。

碁会所の定連客の中には、安規子が働いている料亭の主人や、彼の親戚にあたる佐藤という青年がいた。料亭の主人は帯広が賭けに負けると、よく安規子に年期奉公をさせるなら前借金を出そうと云い云いした。すると帯広はよけいに興奮して負けをひどくした。それで主人は帯広を負かすには、このいやがらせを云うに限ると考えるようになった。

主人の親戚にあたる佐藤という青年は、市の商業学校を出た身でどこへ勤めるでもなく遊びまわっていた。料亭の商売が忙しくなると、割烹着をつけて調理場の手伝いをした。そういうことに器用でもあり、また好きでもあるらしかった。彼は撞球にかけては市でも指折りの腕であるのに、年寄りくさい碁会所へやってくる気持が、帯広には解らなかった。身を束縛される正業を嫌って勝負事に熱中し、この世に何かしら刺戟を探して遊び呆けているやくざな青年があるものだが、佐藤もそういう青年の一人であるらしい。しかし性質は悪くはなかった。むしろ無口な方で穏しかった。主人と帯広の対局をじっと観戦していて、帯広の悪手を見かねたという風に助言することさえあった。勝負に飽きると彼はよく万里子の遊び相手になった。部屋外の縁側で、幼い万里子とお手玉をついた。帯広の代りに公園へ一緒に遊びに行き、時には映画館なぞへも万里子を連れて行った。

安規子はこの佐藤という年下の青年と駈落ちを企てた。くどくどしくは書くまい、帯広は愛想をつかされたのだ。安規子から云えば眼がさめたのである。彼女のロマンチシズムの花は、にがい果実を結んだ。安規子は誰かを支柱にして、キョロキョロと生活にうろたえ廻っている、無能な敗残者から遁げだしたくなったのだ。

安規子が彼女を狙っている料亭の主人ではなく、あまり頼りになりそうもない佐藤を択んだのは、やはりまだ彼女に信仰上の潔癖が残っていた証拠であろう。金の問

題ではない。わが身の自由と感情の問題である。安規子は万里子を愛する青年の心情に、自分に寄せている彼の愛情と尊敬とを読みとったのだ。そして、佐藤ならば、彼女を自由な広い世界に連れ出してくれることが出来ると信じたのである。生活については仲居奉公で、安規子に充分の自信がついていた。

帯広はすでにこういう妻の心理の変化と愛情の危機について、鋭く予感もし警戒もしていた。事件が起きる前、安規子が彼に冷淡になりだしてから久しくなる。彼女はもう勤めの辛さを良人に愬えたり、また良人の意気地なさを嘆いたりしなくなっていた。夫婦の関係も身体の疲労を口実に、ずっと拒絶しつづけていたのである。

信仰で燃えあがった帯広にたいする安規子の情熱は、信仰の火が消えると一緒に世にもつめたいものに豹変してしまった。さめた他人の眼で眺めれば、帯広のような人間は怖毛たつばかり厭わしかった。

帯広が良人として最大の侮辱的な待遇を忍びながら、なお神の手によって結ばれた婚姻の神聖を信じ、妻の愛情の蘇えることを期待して、賭博による金儲けに血眼になっていたのは悲惨である。

早春のある朝、不幸な男は未明のころふと眼がさめて妻の失踪を知った。側の安規子の寝床は蛻抜けの殻で、枕元の衣桁にかけられてある彼女の晴衣もない。

近眼の帯広が前夜床の間においた眼鏡を、あわてきってごそごそと捜しまわっている間に、いつも父と同じ寝床に眠っている万里子が眼をさました。彼女は寝巻のまま起きだして来て父に訊いた。

「お父うさん、なアに」

「眼鏡だよ。眼鏡が見えない」

「ここにあるわよ」

万里子は父の捜しまわっている反対の隅から、すぐに眼鏡を見つけだして父に渡した。

「おお」

帯広は眼鏡をかける間もそわつきながら、

「ありがとう、万里子。さ、風邪をひくといけないからお寝んねなさい」

「お父うさん、どこかへ行くの。母アちゃんもいないよ」

「だから迎えに行ってくる。万里子は穏しくねんねして待ってなさいよ」

「いや、あたいも一緒に行く」

それで帯広はよぎなく、寝巻の上から着物をきせ、不恰好に万里子を紐でおぶって外へ飛びだした。夜明けの街は昨夜の雨に湿っていた。まだうすら寒い朝風が、路上の溜り水に皺を作っていた。帯広は始発の汽車に間に合うよう、駅へ向って駈けた。乱れた頭髪が風に立ち、腰につきだしている万里子の両脚がぶらんぶらんと揺れ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook